

「資料紹介」

図書資料部の近着資料のなかから数点を選んで紹介します。その他の近着資料については『アジア経済資料月報』をご覧下さい。

徳永瑞子: エチオピア日記 飢餓救済キャンプでの150日 東京 海声社 1989年 257p.

これは看護婦であり助産婦である著者が早ばつの被害の最もひどかったエチオピアで被災民救済キャンプの一員として活動した日々(1985年1~7月)の記録である。

著者は23歳のとき現地日本企業の看護婦としてザイールに赴任したが準備不足などから1年で帰国。その後ザイールに戻りたいと思うようになりフランス語を学び、ベルギーで熱帯病の勉強もして再びザイールへわたり都合7年間をザイールですごす。この経歴をみると著者がアフリカに魅かれた人々の一人であるとわかる。このことは著者自身も「アフリカ・ザイールから一ある助産婦の記録」(1982年自費出版)のなかで認めている。しかし本書を単なるアフリカ好きの女性の綴った日記といってしまうわけにはいかない。そこに描かれた被災民の状況が悲惨すぎるからである。

アフリカへ再び帰りたいと願っていた著者はエチオピアの被災民キャンプで働く機会を得る。出発前の予想とは異なりキャンプ設営の許可をもらうことから始めなければならず、キャンプ開始にこぎつけたのは3月になってからであった。栄養失調のため歩行が困難で親に置き去りにされた4歳ぐらゐの女の子アルメイトをキャンプに受け入れたところ「そんなことをしてミズゴは責任がとれますか? みなが子供を置いていってしまう」とエチオピア人のリーダーに言われてしまう。キャンプはあくまでも被災民の自立を支援するものでなくてははいけないのだ。

置き去りにされたアルメイトはしばらくは無表情で

無気力にみえた。ひどい下痢が続き身体中が点滴針の痕だらけになっても何も言わない。体力がついて歩行練習をするようになった頃ようやく著者の顔を見て微笑む。そして別れ。アルメイトのように元気になっていく子ばかりではない。食料を求めてキャンプに来て入院できたものの命をおとすものも多い。キャンプまで来ることすらできないものもある。

読者は被災民救援の実際に触れるうちに援助大国といわれる日本の援助のあり方まで考えさせられることになるであろう。

(鈴木陽子)

関根良雄: 知っておきたいアフリカの歴史 マイライフ社 東京 1986年 iv, 248p.

近年アフリカに関する書物が多く出版されるようになってきた。しかし、専門的な書物が多く、一般にはなじみの薄いものが多いのが現状であろう。本書はこのような日本でのアフリカ関係の出版状況にあって、啓発的な役割を果たすことができる数少ない本の一つであろう。筆者は「高校生も読めて、“現代アフリカを考えられる本”を書くことにした」と記している。

全体は3部から構成され、第I部 人と文化、第II部 アフリカの変貌、第III部 アフリカの再生となっている。第I部ではおおよそ16世紀まで、また、第II部では16世紀から第二次世界大戦まで、第III部で第二次世界大戦以降現代までを扱っている。歴史を扱っているとはいえ、第I部では、現在まで脈々と続いているアフリカの伝統的社会一親族(リネージ)、氏族(クラン)、部族等について触れ、また、歴史の背景となる風土や生活についても触れており、全3部がそのまま

の時代記述であるわけではない。歴史的に、現代のアフリカの政治区分、体制をもたらしたヨーロッパ列強による植民地分割期（19世紀中頃）以降に全体の約半分を当て、記述の中心としている。

先にも書いたとおり、近年アフリカを対象にした書物が増加している。その多くは、現代のアフリカを扱ったもので、歴史については、日本語のものでは山川出版の「アフリカ現代史」を挙げることができるくらいだがこれも全部を読むにはかなりの努力を必要とする。本書は、アフリカ史を概観するには良い入門書となるであろう。特に、高校生ぐらいの年齢の人にとっては、無味乾燥な「教科書的」記述の書物と異なり、アフリカに興味をもって読むことができるだろう。

第Ⅲ部の末尾には「現代アフリカ」の章が設けられ、今日のアフリカが抱える問題である部族主義、モノカルチャー、都市化、交通・教育、飢餓、援助について語られる。これらの問題についての記述は歴史書である以上あまり多くはないが、現代のアフリカを理解する出発点となろう。

本書は、著者が高校で世界史を教えるにあたって教材研究をもとにして書かれたもの。著者は現在栃木県社会教育主事。

(井村 進)

伊谷純一郎： 自然の慈悲 平凡社 1990年
286p.

本書は、京都大学アフリカ地域研究センター長をつとめられてきた著者が、京都大学を停年退官されるにあたり、折々に書きとめられ発表されてきた随想を「これまでの遍歴の証し」として一冊の書物にまとめあげられたものである。「洛北随想」、「野鳥雑記」、「サル学全録」、「アフリカ断章」、そして本書の標題ともなっている「自然の慈悲」の五つの章からなる。

日本の風土のなかで育まれた人間がアフリカに出会ったとき、そのアフリカに抱くイメージはさまざまである。「洛北」の鴨川で「最後の夕映えが消えるまで」トンボとりに興じていた少年は、長じてサルを追って

アフリカに向うことになる。

「1958年に、初めてアフリカに行ったとき、自然に帰ったという実感を抱いた。……アフリカ大陸は……、まだ自然の力の強い、むしろ人間は自然の中で躊躇してやっと生きのびているといった印象」を著者はもつ。「自然災害」とか「自然保証」ではなく「自然の慈悲」ということばをおもいつかせた著者の自然観の形成には、ケニアの北西部の半砂漠に住む遊牧民トウルカナとの出会いも大いに寄与しているだろう。1978年「ともにミルクを飲んであの荒野ですごした」トウルカナ人の「仮借ない人柄にふれ、極限までに簡素化された生きざまを知り、人の生活に極限の美というものがあるとすれば、こういう生活をいうのであろう」と、著者は感ずる。2年後、再びトウルカナの地を訪ねた彼は、旱魃による飢餓にあえぐトウルカナを発見する。しかし「それでもトウルカナは、太陽を指さして、すべては神のなせる業だといって毅然としていた」。

著者の自然科学主義、フィクション嫌いはかなり徹底していて、著者の家では「現代もののロメオドラマにチャンネルを合わせることは……タブーだった」というほどで、普段着の著者の頑固おやじぶりがかい間みえて楽しい。

なお著者は、現日本アフリカ学会会長。

(原口武彦)

細見真也： アフリカの価値観——無文字社会の
伝統思想と日本の教育—— 東京 御茶の水書房
1990年 vi, 233p.

本書は異なった時点で書かれた四つの論文をアフリカの価値観という共通項でくくったものである。だからアフリカの価値観とは何かの答えを期待して本書を手にする読者は期待を裏切られるかもしれない。

ここで取りあげられているのは「視点のちがひ」である。具体的にはアフリカ農民対ヨーロッパ人農場経営者、イギリス人行政官、日本のアフリカ研究者そして日本人全体との視点のずれであり、特に著者が言語感覚と呼ぶものちがひである。この部分はかなり難解である。

著者は「はしがき」で、アフリカの非近代性は彼ら
がみずからの価値判断に基づいて、西欧式近代化は必
要ないと判断したことによっているのだから、アフリ
カを近代化するためにはまずそのアフリカの価値観を
転換させる以外にないが、とりあえずその第一段階と
して彼らの価値観の理解に努めることが本書の目的で
あるという。またアフリカの無文字文化のなかで暮ら
す人々の価値観に照らして己のそれを再検討したかつ
た（「あとがき」）とも述べているように、著者自身い
ずれの価値観にもくみせず、それら相互のずれを指摘
し、その一方的押しつけを戒める意図が読みとれる。
しかし全体の基調は「アフリカの無文字社会の価値観」
をある意味で上に置こうとするものであり、「アフリカ
の価値観」の位置が定めにくい。

著者はアフリカ研究30年の経験に基づいた直感を頼
りに、仮定から大胆に推論する手法をとっている。そ
のため飛躍と感ぜられる部分もある。また日本のアフ
リカ研究者や経済学者の大部分は歴史観や人間観に根
本的欠陥をもつという時、なぜ二人の学者が、本書の
文脈のなかで、とくに批判の対象として選ばれたのか、
説明がほしいところである。だがなぜアフリカを研究
するのかという根本に立ちかえり、自分自身を含めて
価値観を反省するという著者の姿勢に、読者は考えさ
せられ、自分なりの対応を迫られるという意味で、本
書は貴重である。

(丹莖靖子)

ヘニング・メルバー編：わたしたちのナミビア
——ナミビアプロジェクトによる社会科テキスト
ナミビア独立支援キャンペーン・京都 現代企画
室 東京 1990年 285p.

本書は、今年独立したナミビアの初等教育高学年と
中等教育低学年の社会科の教科書であり、ナミビアで
最初の学校教科書である。ただし、国外に亡命してい
たナミビア人の生徒を対象に、独立前に作られたもの
である。ナミビアについて日本語で書かれた情報が少
ないという現状では、この訳書は貴重である。教科書

なので平易で読みやすく、具体的である。

本書は、ナミビアを知るための本として優れている
だけでなく、訳者あとがきが言うように、日本人が日
本の歴史教科書問題について考えることを迫る本であ
る。本書が、ナミビア人とドイツ人（かつてナミビア
の植民地支配者であった）の合同チームによる徹底的
な教育・歴史研究の成果であるという事実はやはり植
民地の支配者であった日本に、植民地支配の歴史を教
育でどう取り扱うかについて教えるところが多いだろ
う。

さらに、歴史に限らず教育・教科書の問題を考える
うえでも示唆に富む本である。たとえば、世界のなか
のナミビア、アフリカのなかのナミビアという方向か
ら入っていきながら、同時に常に生徒たちの身近な問
題としてとらえる書き方がされている。「これまでに聞
いたこと知っていることをお互いに話し合ってみましょ
う」という提起がたびたび登場する。そこには、単
に知識や情報を与えるのではなく、生徒に考えさせ、
話し合わせるという姿勢がある。また本書のかなりの
部分は亡命中の若いナミビア人たちが語った文章であ
り、その意味では、文部省が生徒に与える日本の教科
書とは異なり、教科書自体がすでに若いナミビア人の
作ったものなのである。「はっきりと分からないことでも、
恐れずに書き出してください。何もしないより、
やってみて間違えた方がずっとましなのですから！」
とか「教育は教育だというだけで疑問の余地がないも
のなのではないでしょうか」というところなど日本の管理教育、
詰め込み教育で育った私には新鮮であった。

(児玉谷史朗)

H・マイナー：未開都市トンプクツ 弘文堂 東
京 1988年 361p.+ix.

1940年の調査に基づいて53年に出版された本が、88
年に邦訳された。本書は時間によってその重要性が摩
滅することのない都市人類学の古典である。とはいえ、
内容は決して難解ではなく、「訳者あとがき」のなかに、
「人類学の専門家よりもむしろ、ひろくアフリカ社会

や都市論に関心を持つひとびとに読まれることを望みたい」と述べられているように、さまざまな方面からの関心を刺激する書物でもある。

トンブクツはマリ中部に存在する人口約1万の都市であるが、その歴史はあまりに有名である。マリ王国、ソングイ帝国期を通じ、サハラ砂漠西部の岩塩とセネガル川上流の金との交易活動、そしてイスラム教の普及により宗教・学芸活動の中心として、14～16世紀に最盛期を迎えたこの街の名は、「黄金の都市」として広くヨーロッパ世界に聞こえていたのである。トンブクツは、16世紀の末、モロッコの侵入を受け衰退するが、結局19世紀の末になって、フランスの占領下に置かれることになる。

こうした歴史を反映して、トンブクツの住民構成は複雑である。アラブ系、トゥアレグ系、ソングイ系と三つの民族集団に分かれるが、それぞれ内部に農奴や奴隷を持ち、支配-被支配の構造が存在する。

本書は、序章と最終章で若干の理論的考察が行なわれる以外、トンブクツ都市社会に関する具体的叙述が中心となっている。歴史、住民構成、都市の地区の説明(1～3章)によりトンブクツの見取り図が示された後、経済、イスラム、精霊・邪術、太陽暦、といった住民全体に関わることが前半部(4～7章)で語られる。後半では、親族関係、割礼・年齢階梯、結婚、出産、死などについて、各民族集団ごとに具体的事実が明らかにされている(8～12章)。また、この都市社会における葛藤のあり方についても13章で触れられている。

古典らしく、読者の関心によってさまざまな楽しみ方のできる本である。こうしたアフリカ研究の古典がさらに翻訳されることを切に希望する。

(武内進一)

白石頭二・山本富美子編：ティンガティンガ
—アフリカン・ポップアートの世界 講談社 1990
年

ティンガティンガ、初めて目にする言葉だ。編者の解説によれば、絵画の流派の一つで、創始者の名をと

ったものだという。つまり、本書は「ティンガティンガ派」絵画の画集というわけである。

内容は大きく分けて、図版の部分と文字の部分からなっている。図版の部分は、動物、鳥、生活、マジシャン、ニウンバ・ヤ・サナア(芸術の家)の画家たちの5部に分かれており、それぞれの冒頭に編者による解説が付されている。「文字の部分」にあたるのは、この解説と、本書後半を占める対談(河村要助、谷口広樹「不思議な国の不思議な世界」)そして編者による「“ティンガティンガ派”アート考」である。

画集であるから、本書の最大の魅力はやはり絵画作品それ自体にある。ページをめくりながら、力強い原色のコントラストやデフォルメされてさまざまな表情を持つ動物や妖怪、珍しい風俗などに心を奪われる。

しかし、題材や配色があまりにも「アフリカ風」なので、だんだん不安になってくる。日本で観光地とお祭りだけに登場する「日本風」の土産品が頭に浮かぶ。編者の解説によると、「(創始者ティンガティンガは)首都の路上で観光客相手に売られている安物の風景画を見て、板絵を思いついたという。だから、この絵画の出発はスーベニア・アートであった。今日においても“ティンガティンガ派”絵画はそうした側面を残している」のだという。

どうやらティンガティンガ派絵画は、おみやげ絵という性格を少なからず持っているようである。しかし、白石、山本両氏は、ティンガティンガ派の絵を単なる「アフリカ風のおみやげ品」とは見ず、そこに芸術性を見いだした。この画集の価値はここにある。

白石氏は言う。「彼らはいわばアフリカの大地から授けられ、内在させていたエネルギーと天分を、正方形の板とエナメル・ペンキを得て一気に爆発させ、燃焼し、彼らの民族、ひいてはアフリカの人々の太古以来の記憶を平面に存続させるべく、神から“宿命”づけられたのだ」本書は、図版の素晴らしさもさることながら、図版の背景、「文字の部分」の色づかいも鮮やかでデザインも工夫されており、編者の思い入れの深さが伝わってくる。

(津田みわ)

M. M. Huq, *The Economy of Ghana : The First 25 Years since Independence*, Macmillan Press, London, 1989, 355p.

ガーナ国民は1970年代後半から外資不足、生産活動の停滞、インフレの昂進、旱魃による食料不足、あるいは財政難の深刻化など、ほとんど全面的ともいえるべき経済的困難を経験してきた。

こうした経済危機を克服するため、81年末に成立したローリングス軍事政権は3度にわたって平価の切下げを断行するとともに、アメリカをはじめとする西側諸国に一層の経済協力を要請してきた。

1983年2月、IMFとのあいだで3億8000万ドルの緊急援助(融資)に関する合意が得られたことを受けて、政府は第一次経済復興3カ年計画(ERP, 84~86年)を策定するとともに、83年10月と84年12月にはパリにおいて、西側諸国の対ガーナ援助国会議を開催し援助を要請するなど経済再建への努力を重ねてきた。

これらの政策努力は、気象条件にめぐまれたことも幸いして、1984年度以降の国内総生産の実質成長率を従前のマイナス成長から6%台にまで回復させるとともに、年率100%以上を記録していたインフレを40%程度にまで鎮静化することに成功し、最悪の事態は脱

したものとみられる。

本書の著者は、1957年3月の独立時点において、ブラック・アフリカ諸国が見習うべき「手本」であるとさえ言われたガーナ経済が、なぜ、前記のような危機的状況を招来するに至ったのかという問題意識にもとづき、さまざまなマクロ指標を駆使しながら、独立後25年間の経済実績を包括的に分析、検討することを通じて、その根源に迫ろうとしている。

著者の結論は、経済危機の原因を価格政策や通貨政策の誤りに求めている点で「平凡」な結論であるようにみえる。しかし、これまで類書ではほとんどとりあげられることのなかった「闇の経済」(Black Economy)を1984年年6月に著者たちが実施したサンプル調査にもとづいて考察し、歴代のガーナ政府が採用してきた価格統制令と闇経済の拡大過程を論理的に関連づけて指摘している点は高く評価されてよい。

なお、著者は国内総生産をはじめとする主要な経済指標を1970年価格を基準に整理して表示しているが、この資料は、独立後25年間における経済実績の推移を統計的に把握するうえで、一般読者にとってもきわめて便利である。

(細見眞也)